

高等学校運動部活動における指導者と生徒の人間関係構築と 集団に対する指導者の適切な働きかけに関する検討

スポーツ文化研究領域

5023A078-9 吉武 温子

研究指導教員：吉永 武史 准教授

【序章】

2017（平成 29）年に告示された中学校学習指導要領および 2018（平成 30）年に告示された高等学校学習指導要領（以下、学習指導要領とする）において、部活動は「スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質能力の育成に資するもの」（文部科学省、2017；文部科学省、2018）と述べられており、学校教育の一環として位置付けられている。また、2013（平成 25）年に文部科学省から提示された「運動部活動での指導のガイドライン」（以下、ガイドラインとする）では、運動部活動の持つ意義や生徒に与える効果について述べられている。これらのことから、部活動には生徒の持つ様々な資質能力を向上させる効果が期待されていることが窺える。

ガイドライン（文部科学省、2013）では、部活動の意義や効果の一つとして「学級内とは異なる人間関係の形成」があげられている。また、「人間関係形成・社会形成能力」は社会生活を営む上での基礎となるとされている（文部科学省、2011）。このように、人間関係を構築する力は学校卒業後、より広い社会に出る生徒たちにとって非常に重要なものであり、特に運動部活動にはその能力を養う場としての教育的価値が期待されているといえるであろう。そして、ガイドライン（文部科学省、2013）においては、指導者との関わりについても述べられていたことから、この能力は生徒同士でのみ育成されるものではないと考えられる。

これまでに、運動部活動における指導者と生徒の人間関係に関する研究が行われている。指導者の生徒への関わり方についても様々な議論がされており、指導者は部内の人間関係の構造を適切に把握し、その実態に即した指導や働きかけを行っていくことが求められている（鈴木・荒俣、2021）。また、指導者の部員個人に対するハラスメント行為が部内のいじめや生徒の精神的健康に負の影響を与え、性別によってもその影響が変わることが指摘されている（藤後ほか、2018）。このことから、指導者から部活動の集団への関わり方だけではなく、指導者の個々の部員に対する関わり方も部内の人間関係に影

響を与えるといえよう。したがって、指導者の存在は人間関係の構築を含めて運動部活動に参加する生徒にとって重要な役割を担っていることが推察される。

しかし、部活動での指導者による不適切な指導とそれに関連する問題は、現在でも生じている。さらに、指導者と部員の間で発生する問題も、暴力行為は減少しているものの、暴言やパワーハラスメントは増加傾向にあることが指摘されている（JSPO、online）。運動部活動には先に述べたような教育的な効果が期待される一方で、適切に運営されなければ部員に負の影響を与える可能性もあるのが現状である。

以上のことから、学習指導要領において述べられている責任感や連帯感の涵養にあげられる資質能力が育まれるよう、部活動での経験が生徒の成長に役立つものにするとともに、不適切な指導やいじめといった部活動に関連するさまざまな問題を解消していくために、指導者が生徒との人間関係を構築するための要因や、求められる関わり方について検討していくことが必要であると考えた。

そこで本研究では、指導者が生徒と適切な人間関係を構築するための要因と、運動部活動での生徒同士の人間関係を良好に保つために求められる指導者の関わり方を明らかにしていくことを目的とした。

【第 1 章】

第 1 章では、まず、学校で行われているスポーツには人間形成などの様々な教育的価値が期待されている一方で、部活動では指導者による不適切な指導や部員間でのいじめといった教育的価値を損なう問題が発生しており、それらの原因の一つとして文部科学省などの各機関が示すような適切な人間関係が築かれていないことがあげられることを指摘した。それを踏まえ、部活動において適切な人間関係を構築するための要因について、指導者の役割の点から検討を行った。その結果、部活動において適切な人間関係を構築するために、指導者が体罰やいじめなどの不適切な行為を許さない態度を持ち、他者を尊重する言動を行うことが重要であることが明らかになった。さら

に、指導者の存在は部活動内の人間関係に影響を与えることが改めて確認できた。これらを踏まえ、アンケート調査とインタビュー調査によって、部活動における指導者と部員の人間関係の構築について検討を進めることとした。

【第2章】

第2章では、公立高等学校4校の運動部活動に所属する生徒205名（男子147名、女子58名）および、その指導を担当している指導者16名（男性10名、女性6名）を対象に、指導者との人間関係並びに生徒との人間関係に関するアンケート調査を実施し、部員と指導者が相互の人間関係をどのように捉えているのかを考察した。また、より精緻にするため、部員においては競技種目（個人種目・集団種目）、性別、学年、指導を受ける指導者の性別、指導者においては指導する競技種目（個人種目・集団種目）、指導者の性別、指導している部員の性別による比較を行った。

その結果、部員と指導者の両者とも、それぞれに対する人間関係を肯定的に捉えていることが推察された。一方で、指導者と部員の両者とも、競技上での協力関係を長期間継続させたいと感じる程度を測る項目の得点は他の項目と比較してやや低くなっていた。その理由としては、部活動を行うのは高校に在籍する期間に限られるため、高校で指導を受けた指導者に継続して指導を受けることが難しくなること、競技を継続する意思を持つ部員や部員に競技を継続する意思があると考えている指導者が少ない可能性があることなどが考えられる。よって、指導者は部活動では競技面に限らず、部員の将来も見据えた指導を行うことで、部員が自身の将来に対する指導者の影響を感じやすくなり、指導者と部員の人間関係をより良好にすることができると推察される。

【第3章】

第3章では、高等学校の運動部活動で指導を行う教師4名を対象に、半構造化インタビューを実施し、部活動を指導する上で留意していることや部員との人間関係の構築、部活動の集団に対してどのように関わっているかについて分析を行った。インタビューの対象となった教師は全員が異なる高等学校、競技種目の指導を行っていた。

その結果、指導者によって部員との人間関係を構築する上で重視している点や集団への関わり方は異なっていた。しかし、「部員と関わる機会」を持っていることが部員との人間関係の構築に影響を与えていると推察される指導者が4名中3名に見られた。「部員と関わる機会」が生まれる理由は、「部員の

担任を持っていること」や「部員から話しかけられる」、「指導者自身が関わる機会を増やす」など、それぞれの指導者で異なっており、指導者自身の経験や置かれている状況によって変化していることが推察された。また、部員に対する肯定的な言葉掛けやフィードバックを与える行為は、4名全員に確認することができた。このような部員への関わりは、部員との人間関係を適切に築く上で有効であると考えられる。さらに、指導者4名全員が部員に対して「部活動を通して社会で役立つ力を身につけてほしい」と考えており、そのための指導者自身が捉えている指導者としての役割は様々であった。このことから、指導者は、指導する部員や競技種目の特徴などに応じて部員に対して接していることが推察される。

【結章】

本研究の目的は、高等学校の運動部活動において、指導者が生徒と適切な人間関係を構築するための要因と、運動部活動での生徒同士の人間関係を良好に保つために求められる指導者の関わり方について明らかにすることであった。分析の結果、以下のことを導き出すことができた。

指導者が部員との間に人間関係を構築し、集団に対して適切な働きかけを行うためには、まず、指導者が部員と関わる機会を設ける必要があることがわかった。その際、指導者は、指導している部員の特徴や性別、指導している競技や指導者自身の置かれた立場に応じた形で部員と関わり、様々なアプローチを行うことで部員との間に人間関係を構築し、部活動の集団に対して必要であると考えられる働きかけを実践することができるのである。

そして、部活動を指導する上で、競技を継続するか否かという部員自身の意思を踏まえた上で、部活動での競技への取り組みでは何を最終目標とするのか、競技以外の部分ではどういった目的で部活動を行うのかを指導者と部員の間で共有することで、部員が高校在籍中にその指導者に教わることの意義を見出すことができ、指導者と部員の間に良好な人間関係が構築される可能性が示唆された。

また、本研究の課題として、より多くの指導者を対象にして、より深い分析ならびに考察を行わなければならないという点、インタビュー分析の妥当性をより高める必要があるという点、インタビューの対象を部員にも広げる必要があるという点、インタビュアーの力量により、情報が左右されるという点、そして最後に、インタビューでの質問項目の検討という点があげられる。今後の課題としたい。